

東ユーラシアの経験—伝播のネットワークからみた大モンゴルの時代—

同志社大学 向正樹

0. 導入

○時代背景—大モンゴルの時代(13～14 世紀)—

- ・「ユーラシア史上、ただひとつ、ユーラシアの中央をおおうぼんやりとしたもやがすっかり吹きはられ、東西すべてをひとつの全体像として眺められる時代がある。それは西暦十三、十四世紀に、人類史上、最大の版図をつくりあげたモンゴルとその時代である。……ユーラシアの東西は、モンゴルの主権のもとにむすびつけられ、いやおうなくおなじ時代を生きざるをえなかった。……」 [杉山 1992]

○BTN 分析 (Bounding Transmit Network Analysis)

- ・BTN はひとつの連関がある「刷新」を可能とし、またそれが「翻訳」され伝播することで新たな連関が作り出されていくさまを追う

アクタント＝人・生物・モノ

伝播＝アクタントのあいだを技術・アイデア・イメージ etc.が伝わること

ネットワーク＝伝播を可能としたアクタントの間の結合

バウンド＝かなり離れた時代・地域に達しているような伝播の現象 [向 2020]

- ・本日の講義では、軍事技術と食にまつわる伝播の事例をクイズ形式で紹介する
ライフメーター（1 問間違えるたびに右から 1 つずつ目盛りを黒く塗りつぶします）

--	--	--	--	--

I. 貿易陶磁史からの問い—遠距離交易によって運ばれたモノとは？

Q1 モンゴル帝国時代の中国の景德鎮（けいとくちん）という焼き物の町で、あるタイプの磁器が大きく発展し、人気の国際商品となった。その上品で鮮やかな印象のデザインは、マイセンをはじめヨーロッパの磁器のデザインにも大きな影響を与えた。それはいったいどのようなデザインか？

答え：

Q2 ブルー・アンド・ホワイト（日本では染付、中国では青花）でミルクティーを飲むのは英国風の文化であると認識されている。しかしブルー・アンド・ホワイトはモンゴル時代の国際商品であり、モンゴル宮廷でも使用された。現在モンゴル国にはスーテーツァイというミルクティーがあるが、その歴史は比較的新しい。14 世紀のモンゴル宮廷にはミルクティーはなかったが遊牧民独特のお茶があった。それはどのようなものか？

答え：

○大ハンのレシピ本—『飲膳正要』

- ・モンゴル帝国を束ねた大ハンの生活するテントを大オールドという。そこには、ケシクテンと呼ばれる親衛隊が常時控えており、身辺警護のほか、大ハンのオールドでの生活にかかわる様々な仕事をしていた。そのなかにバウルチ ba'urchi というコックを兼ねた仕事も。→クビライが中国に帝国の中心を置いて以降、役職名は中国風のものが増えていく。

【図 大オールド（宮廷）の様子】

[Rašīd al-Dīn Fazl-ullāh Hamadānī, *Jamī' al-Tawarikh* (Diez Album)より]

- ・『飲膳正要』...元の宮廷料理人（飲膳大医）忽思慧が記した食に関する覚書を文宗皇帝トクテムル（1304-1332）に献上。目を通した皇后ブダシリが皇太子や皇后の財政を扱う中政院使・儲政院使バイジュ（拝住）に命じて刊行させた。高名な文人虞集（1272-1348）が序文を書く。

【図 『飲膳正要』（同志社大学蔵）】

○西蕃茶，炒茶，酥簍

- ・酥簍...金字末茶（湖州産）を使う。湖州は唐の陸羽が『茶経』を書いた地。末茶＝抹茶
- ・酥油...「牛乳中取浮凝熬而為酥。」
- ・馬思哥油...炒茶に使う一種のバター。ポール・ブエル氏によると馬思哥油は mäska Oil。阿赤は qashiq. mäska はトルコ語。『維漢詞典』（ウイグル語漢語辞典）によれば「〈方〉酥油，黄油」[Buell and Anderson 2010]
- ・ヤクバターの作り方
ヤク（チベット牛）の乳を絞ったあと布でこし，圧力を加えたあと（温度が低い方がたくさんとれる），大筒に入れて揺らすと表面にバターができる。

<https://m.youtube.com/watch?v=oLl5FYeSrRY&feature=youtu.be>

○白磁と青花

- ・中国の歴史学者，史衛民によれば，「元代に青白茶盞が増える」
→青白瓷（影青）は白瓷に分類される。
- 【図 新安沈船出土元代青白瓷（国立光州博物館）】※立教大四日市康博氏より提供
- ・元青花（染付）の登場
【図 元青花托盞】[朱 2010]

○BTN

<広がり>

- ・英国デイヴィッド財団，トルコ・イスタンブールのトプカプ宮殿，イランのアルダビール廟，日本の大阪市立東洋陶磁美術館，東京国立博物館，出光美術館，松岡美術館にほぼ完品の景德鎮産元青花のコレクション。
- ・元青花磁器の破片は中国やモンゴルの都市や窯の跡のみならず，エジプトのカイロのフスタート遺跡から大量に出土し，日本列島（沖縄を含む）・フィリピン・ブルネイ・インドネシア・インド・ペルシャ湾やアフリカ東海岸の古い都市や港町の遺跡でも出土。

<バウンド>

- ・14 世紀には，東南アジア大陸部でも輸出用の磁器生産開始。ベトナムでは元青花から影響を受けた青花が作製され，15 世紀には東は日本列島から，西はマムルーク朝，オスマン朝までと，かつて元青花が運ばれたルートをなぞるように輸出された。
- ・18 世紀初，ヨーロッパで磁器が開発される（中国人の発明から 1700 年あまりあと）：1709 年，東洋磁器コレクターのザクセン王国アウグストス強健王のもと，領内のシュニーベルク付近から採集されたカオリンを使って錬金術師ベットガーが硬質磁器焼成→翌年，マイセンを見下ろすアルブレヒツブルク城内に王立窯設立
- ・オーストリア帝国陪臣デュ・パキエがマイセンで働いていた陶工や陶画家をウィーンに招き，磁器焼成をスタート→マリア・テレジアに譲渡し王立ウィーン窯へ
- ・イタリア（1720 年）でマイセン，ウィーン窯の化学者コンラッド・フンガーを招きヴェネツィアにヴェッツィ窯開設。フランス（1768 年）でも真正磁器焼成

★宿題 元青花に関係する場所を地図に落として矢印でつないでみよう

※景德鎮（中国江西省）を起点に応昌（中国内蒙古）、トロウラン（インドネシア・ジャワ島）、イスタンブール（トルコ）、カイロ（エジプト）、アルダビール廟（イラン）、琉球（日本）、大英博物館（イギリス）

Ⅱ. 食文化史からの問い—磁器を運んだ船が帰りに中国に運んだモノとは？

○帰港時の積み荷

- ・1974 年、泉州市近郊の「后渚」で一隻の沈没船が発掘された。南宋時代のもものと推定される全長約 30 メートルの木造船には、マルコ・ポーロの『世界の記述』に紹介されている中国船の記述と完全に合致する特徴があった。

→隔壁、つまり船倉に仕切りを設け、船体が損傷してもひとつの区画で浸水を食い止め、沈没しにくくする技術。※「后渚」はジャワ遠征の艦隊が出航した港。

- ・この泉州沈船から積み荷の南海物産が発見され、海外から帰帆したときに沈没したと推定。胡椒・ビンロウ・水銀・朱砂・龍涎香、そしてアラビアが原産地の乳香も。荷主を示す墨書のある木製の荷札も多数、商人やその代理人らを荷物とともに運んでいた。

○ふたつの「ういろう」

- ・「ういろう」といえば、米粉・麦粉に黒砂糖を加えた蒸し菓子がよく知られるが、透頂香（とうちんこう）という菓子の別名でもある。ふたつの「ういろう」のルーツは、ユーラシア東方におけるモンゴル時代の海域交流にある。ここでは、室町時代の日本で生まれたふたつの「ういろう」に関わるアクターの連関を見てみたい。

Q3 米・小麦粉・砂糖を用いた和菓子「ういろう」は次のどれか？【写真】

1.

2.

3.



答え：

出所：伊勢志摩観光ナビ HP <https://www.iseshima-kanko.jp/feature/uiro>

世田谷自然食品 HP <https://www.shizensyokuhin.jp/archives/articles/538>

本家西尾ハッ橋 HP <https://www.8284.co.jp/products/index>

○「外郎」と外交・医食

- ・江南（長江以南）で明朝が成立した 1368 年に一世外郎の陳順祖（又の名を陳延祐、陳宗敬）が博多に来航。二世外郎の大年宗奇が足利義満の招きで京都に移る。一世・二世父子は朝鮮や中国との外交に活躍。
- ・一世陳外郎には「太医院」としての経歴あり。それが「透頂香」の誕生に寄与したと考えられる。正確な官名は「太医院」。金の制度を踏襲し設置されたもの。元の太医院は医事を掌り、御薬物（皇帝のための薬）を製奉し、各属医職を領した [『元史』巻 88・百官志 4・太医院, 2220–2221 頁]。
- ・至元 12 年（1275）～、太医院の長である提点が礼部の長である尚書を兼ねる [『元史』

巻 168, 許国禎伝; 高偉 1994, 40 頁]. 陳外郎が代々継承する「外郎」という肩書きは正式には「礼部員外郎」(正六品). 礼楽・祭祀などを司る, 一見外交とは無縁の官職.

元貞元年 (1295) ~, 礼部が会同館の仕事を担当, 尚書を増員.

- ・中書省六部の尚書および部下の侍郎・郎中・員外郎が, 征服前の雲南大理や南宋も含め外国へ出使する例は多い. 日本: 至元 5 年 (1268) に兵部侍郎黒的と礼部侍郎殷弘, 至元 12 年 (1275) に礼部侍郎杜世忠と兵部郎中何文著. ベトナムと「瑠球」(台湾) へ礼部員外郎が出使. 唐・五代・宋・遼では確認できないが, 金朝では礼部員外郎が高麗へ, モンゴルは金朝の制度を踏襲. 明代初期 (洪武 10 年 [1377] の暹羅への使者) も礼部員外郎の出使.

→外交に従事することと礼部員外郎という官職を帯びていたこととは矛盾しないどころか, 礼部や吏部・兵部の官名をもつ使者を送ることは元の末期まで続いた制度であった.

○阿仙薬と海域世界

- ・外郎が透頂香 (とうちんこう) に使った芳香性薬剤は丁香, 白檀, 竜脳, 沈香, 木香, 安息香, 蘇合香油, 麝香, 白膠香, 檳榔子, 陳皮, 橘皮, 縮砂, 阿仙薬など [杉山 1999: 37].
- ・現在小田原市の株式会社ういろうが販売している透頂香は石膏 0.618g, 丁香 0.937g, 竜脳 0.187g, 薄荷脳 0.187g, 麝香 0.037g, 茸撥 0.187g, 人參 0.937g, 阿仙 20.625g, 桂皮 0.562g, 甘草 0.937g, 蓬砂 0.562g, 縮砂 1.031g. →阿仙香が主成分.
- ・『飲膳正要』にみえる「渴忒」が阿仙薬を指すと思われる. そして, その渴忒が何から取られるかについては二つの説がある. つまり, インド原産のマメ科のアセンヤクノキ (senegalia catechu) または南インド・スリランカから東南アジアのマレー半島, スマトラ島, ボルネオ島などに自生するウンカリア・ガンビール (uncaria gambir) の木である. [忽思慧 1993: 147].

Q4 アセンヤクノキやガンビールの木の枝葉の枝幹を煎じた汁を濃縮して乾燥エキスにしたものが「渴忒」. どちらも多量のタンニンを含み, 収斂性があり, 口内清涼剤に適している. この「渴忒」は緑茶の主成分の名前の由来となった. その緑茶の主成分とは何か?

答え:

・カツイク?×

英語の『飲膳正要』訳注が出版されているが, そこでは「渴忒」はカツイク (qatiq) つまりテュルク由来の発酵乳製品 (ヨーグルトの一種) と解している [Buell and Anderson 2000: 384, 2021: 158]. こちらの説を採れば「渴忒」と阿仙役との繋がりはない. しかしヨーグルトが錠剤になるとするのは想像しづらい.

・カテキュー○

アセンヤクノキは (阿仙薬の木) はペグ阿仙薬とも呼ばれる. 学名のカテキューは様々な言語に入っておりカテキンの語源ともなった. そしてまさにこのカテキューなる語が『飲膳正要』の「渴忒」(k'hat-thək) と音写されたとみて良い. しかし, 錠剤という点では, 東南アジア産のウンカリア・ガンビールの方が, 『飲膳正要』の「渴忒」により近いように思われる. 17 世紀末頃にはマレー半島一帯でガンビールの錠剤が売られていた. 錠剤にする方法はマレー人がインドのタミル人に伝えたと考えられている [南方圏研究会 1934: 416].

では、日本へはいつから阿仙薬が入ってきたのか。対明・朝鮮関係に関わったのは二世・三世の外郎のときであった。主として朝鮮との交易にあたり、ときに明との交易にあたった。外郎の透頂香の主成分である阿仙香は日本や朝鮮で 15 世紀初頭に知られていることが朝鮮の文献にインド、タイ、ベトナム、中国（明）などからの対朝鮮中継品として現れる [杉山 2000 : 195 ; 福岡県 1962, 第 1 巻下 : 488]。他の成分である縮砂も 14 世紀中頃に知られている。透頂香成立はこの頃可能であった。

・キンマ、ビンロウとガンビール

インド・東南アジア・オセアニアにキンマという噛む嗜好品がある。いわゆるベテル・チューイングである。マルコ・ポーロやイブン・バットゥータもそれぞれインドのマアバル海岸のカーヤルやパキスタンのムルターンにおけるキンマ（タンブール）の葉を噛む風習について言及する。

イブン・バットゥータは「檳榔子（ファウファル）を細かい破片になるまよく砕いてから、それを人は口の中に含んで噛む。その後でキンマの葉を取って、その葉の上に少々の石灰（ヌーラ）を置き、檳榔子と一緒に葉を噛む」という [イブン・バットゥータ 1998, 第 3 巻 : 157]。ここには明記されていないが、キンマとともにガンビールが収斂性酸味として添用された。厳密に言えば、ガンビールのエキスを石灰乳と混ぜ、檳榔子（ベテルナッツ 学名 *areca catechu*）の切片に塗り、キンマの葉で包んで咀嚼する。キンマの葉にガンビールを包んで咀嚼する土地もあるという [杉山 1999 : 44-46]。石灰を用いることは『太平御覧』巻 971 所引『雲南記』にも見える [趙汝适 1990 : 285]。

○砂糖と蒸し菓子「ういろう」

・日本列島と砂糖...長くサトウキビはなかったため専ら輸入に頼っていた。はじめて砂糖をもたらしたのは遣唐使船とされている。室町時代には砂糖はインド・タイ・ベトナム・中国（明）方面から朝鮮経由で輸入された。

・日本列島産の砂糖としては江戸時代の 1623 年、琉球の儀間真常が福建から製糖法を学んで黒砂糖を作ったのがはじまりである。日本独自の白砂糖である和三盆糖が作られたのは 19 世紀になってからであった [佐藤 2008 : 21 ; 杉山 2000 : 195]。

→つまり、砂糖というアクターが「ういろう」の誕生に関わるためには、朝鮮や明・琉球との海域交流が不可欠だったのである。

○製糖技術とスイーツ文化の伝播

モンゴル時代の中国において、砂糖の精製技術の発達と砂糖を用いた飲食物の需要の高まりがあった。

・甘蔗洲...明の黄仲昭編『（弘治）八閩通志』巻 28 によると、宋代の侯官県には「甘蔗洲」というサトウキビ畑があり、元豊 7 年（1084）から、「甘蔗洲巡検一員」が派遣され「私塩」（密売）を捕捉する任に当たった。元代にも「甘蔗寨巡検一員」を見いだせる [黄仲昭 1989, 上 : 589, 592]。

・砂哩唎...『八閩通志』巻 20・食貨・土貢には元代の泉州の物産に砂哩唎が見える [黄仲昭 1989, 上 : 403 頁]。これはアラビア語のシャルバー (*sharbāt*) の音写で、砂糖を用いた清涼飲料であった。

・バビロン人...マルコ・ポーロ『東方見聞録』によると、大ハンの宮廷で使用する砂糖はすべてウンケン市（侯官県）から上供されており、その砂糖精製の技術は大ハンによる征服後、朝廷に仕える「バビロン人」が伝えたという。ここでいう「バビロン」とはエジプトの旧都フスタートにある「小バビロン」を指すという。佐藤次高によれば、マルコ・

ポーロが記す砂糖精製の技術は、ウブルージュと呼ばれる円錐形の壺を用い覆土法により分蜜する方法である。当時、フスタートには上質な砂糖を製する製糖所が六五もあったという [佐藤 2008 : 87]。

Q5 米粉・小麦粉・砂糖を用いた菓子といえば、中東の伝統的な菓子ハルワー。元代の日用類書『居家必用事類』庚集 20 卷「回回食品」の 7 番目に「哈耳尾」と記され、「乾麪（小麦粉）をじっくり炒め、ふるいにかけてさらに炒め、蜜を垂らし、水を少し加えてかき混ぜてでき、それをちょうど良い断片に切り分ける」と説明される。作り方は今も作られるハルワーそのものである。ではハルワーと「ういろう」の作り方の違いは何か？

答え：

- ・作り方は今も作られるハルワーそのもの。
- ・「蜜」は蜂蜜かもしれないが、アラビア語文献に出てくるハルワーは砂糖のほか糖蜜を用いる。蜂蜜はアラビア語でアサルというが、サトウキビの搾り汁を煮沸してウブルージュで製糖すると粗糖（カンド）とともに得られる糖蜜もアサルと呼ばれた [尾崎 2006 : 30, 35, 41 ; 佐藤 2008 : 71]。
- ・ウブルージュに似た円錐形の壺を用いた製糖法は元のときに伝わったか。とするなら、「蜜」を糖蜜とみることが技術的には問題はない。

○BTN

<同時代のつながり>

- ・陳友諒と元末の群雄...三世外郎から聞き取った話を記した『幻雲文集』によれば、一世の陳順祖は元末に江西・湖南を中心に一大勢力を築いた陳友諒の宗族。陳友諒は紅巾軍系の部将のほか、自身の兄弟や姻戚関係の人物を多く取り立てた [谷口 1980]。ただし、その勢力圏外にある台州の陳外郎とのつながりは薄い。台州に拠る方国珍政権は元に帰順後、日本と通交 [榎本 2002]。陳外郎は元あるいは方国珍の命を受け日本に向かったか。陳外郎が朝鮮との外交に活躍したことは陳友諒の子の陳理が降伏後に朝鮮に送られていたことと関わりがあるか。
- ・陳友諒とベトナム...陳友諒にはベトナムの陳朝とのかかわりを指摘する研究もある。陳友諒は安南国王陳益禪の子であるという。陳益禪とは陳朝の聖宗（在位 1258—78）の弟である。元の世祖クビライの遠征軍に投降し、安南国王に封ぜられた。ベトナムの歴史書『大越史記』紹豊 14 年・元の至正 14 年（1354）2 月の条に「元の陳友諒兵を起こし、使を遣わし来たりて和親を乞う」という記事があり、そこに注記して「友諒は陳益禪の子なり」と書いているのに拠る [和田 1978 : 44, 68]。結局、大治 4 年・元至正 21 年（1361）2 月の条によれば、朱元璋に敗れて湖北の武昌に退いた陳友諒が使者を送り援軍を頼んだが陳朝は応じなかった。和田博徳は「陳友諒が朱元璋らと覇を争うため、ベトナム陳朝との友好関係を結ぶ必要を感じ、同姓であることを利用して、陳朝皇族の陳益禪の子と詐称して遣使したことを示すものとみてよいであろう」とする。ベトナムへの遣使は湖南からであれば陸路を通じてであったが、台州にいる陳外郎とのつながりは薄いだろう。

<後世への影響>

- ・外郎売...杉山茂氏によれば、透頂香ははじめ整髪料として、次に主成分の阿仙薬（ガンビール）の性質である口内の清涼感を得るというために用いられた。硼砂（硼酸ナトリウム）が配合されていることで、咽喉の症状にも効果。享保 3 年（1718）、2 代目団十郎

が喉の不調により小田原外郎の透頂香を服用。感謝した団十郎は、狂言芝居「若緑勢曾我」に、「外郎売」の恰好をして透頂香の由来・効能を滔々と説く長大な台詞を導入し、好評を博した。2019 年には市川海老蔵の息子堀越勸玄が披露して話題となった。

- ・ 蠅螂山（とうろうやま）…祇園会はもともと祇園御霊会と呼ばれた。西暦 860 年代、日本列島では疫病・火山噴火・地震・津波が連続して襲い、869 年に悪霊を鎮めるため御霊会が催された。当初は 3 基の神輿のみがあったが、15 世紀頃、煌びやかな装飾を施した山鉾が登場し祭に華を添えた。室町後期に描かれた国宝上杉本洛中洛外図には三台の山鉾が描き込まれている。神輿とともに祇園祭前祭の顔ともいえる長刀鉾と船鉾、そしてもう一台は蠅螂山である。唯一からくり仕掛けによって羽が動く巨大カマキリが目を引く。
- ・ 蠅螂山町…「蠅螂」とは漢語でカマキリのことである。四条西洞院と錦小路西洞院の間にあたる、京都市中京区西洞院通り四条上ル蠅螂山町に蠅螂山の保存会がある。そこは江戸時代の京都図には「かまきり町」と記されている。蠅螂山は応仁の乱（1467—77 年）前後に存在していたことが知られ、1500、1756 年の書物に前祭への参加が記されている。1864 年の大火で焼失したのちながく途絶えていたが、1981 年に再興された。蠅螂山町はもともと室町時代に陳外郎の一族が住んでいた。京都では外を「トー」と発音し、外郎を「とうろう」と読んだ。これを漢語の「蠅螂」にあて、1376 年、二世陳外郎大年宗奇が建造したと伝えられる。宗奇は足利義満の招きに応じ、博多から京都に移り住み、貴族相手の医師となるほか薬や香具を売って富を築いたとみられる。
- ・ 本圀寺（ほんこくじ）と外郎と朝鮮通信使…杉山茂氏によれば、京都の外郎家は医師として記されることがなくなり、薬屋・香具屋に転身していった [杉山 1999: 54]。戦国時代になると、外郎家の傍流宇野藤五郎が京都から北条早雲の本拠地である小田原にうつる。宇野氏は蠅螂山町から西南方向にある日蓮宗の巨刹本圀寺の門徒であった。小田原にも日蓮宗の玉伝寺を建てた [杉山 1999: 66]。本圀寺は江戸前期の寛永 13 年（1636）から朝鮮通信使の宿として使用された。室町後期の上杉本洛中洛外図には、本国寺（江戸時代に水戸光圀にちなみ表記を本圀寺に改める）が同じ場所に、そして蠅螂山町にあたる四条西洞院辺りの街並みも描かれている。
- ・ 水無月（みなづき）…江戸時代、『南総里見八犬伝』を書いた滝沢馬琴が京都・大阪を旅したさいの見聞をまとめた『羈旅慢録』では京都の「外郎粽」について「黒砂糖にてよからず」と記す [虎屋文庫 2017: 24-5, 168]。「ういろ」はすでに多くの菓子屋が作っており、江戸後期には京都で良く知られた菓子に、かつては三角形で、代々宮中に粽を担当した老舗の川端道喜家の明治 4 年（1871）宮中の歳時について記した『月々御定式御用控』に、6 月末に氷室の水無月という内裏で食された菓子があり、氷に模した三角形のういろに煮小豆を載せた [川端 1990: 95]。
- ・ 「ういろ」…やがて「ういろ」は全国に広がり、金沢の「銘菓五建」、岩手の「小豆ういろ」、熊本の「生ういろ」、姫路の「生麩ういろ」、広島「黒豆ういろ」など、各地に展開している。米粉・麦粉・小豆を練って砂糖を加えたもちもちしたスティック状の蒸し菓子である。

宿題

- ・ ふたつの「ういろ」—透頂香と蒸し菓子—誕生にかかわった主要アクターは誰（何）？
 1. 「ういろ」という名前の由来は金・元代の官制に淵源。元の制度では太医院と礼部とが関係を持ち、礼部員外郎が外交使節となった。
 2. 透頂香の主剤である阿仙香はおそらく東南アジア産のウンカリア・ガンビール。そ

の薬としての使用はモンゴル時代にさかのぼる。

3. 砂糖は室町時代にはインド・シャム・安南・明等から輸入された。米粉・小麦粉に水と砂糖ないし黒砂糖を加えた菓子「ういろ」は、陳外郎自身がハルワーに着想を得たか、あるいは『居家必用事類』などの書物を通じて伝わったかもしれない。その場合、知識は書物というアクターを媒介してバウンドした。ちなみに外郎家にはおびただしい中国由来の蔵書があったと言われている [杉山 2002 : 148].

・「ういろ」は、モンゴル時代の海域アジアという背景なくしては成立しなかった。

Ⅲ. グローバル史からの問い

戦争の機械 engine

- ・第3代大ハンであるグユクの宮廷を訪問したフランチェスコ会修道士プラノ・カルピニのジョヴァンニ（1182-1252）は、モンゴル軍が備える各種の装備や兵器の叙述とその対処法の提言に多くの字数を割いている。彼はそのなかで、モンゴル軍が使用する「**機械**」（**engine**）に言及する。これは攻城戦のための兵器であった。

加えて、かれらはこれらの武器を携帯するよう要求されている。長弓2張り、もしくは少なくとも優れた長弓1張り、矢を満載した箆（えびら）3杯、斧1丁、それから機械を引くための縄である。 [Carpini 2013, ch. 17.]

Q6 モンゴル軍は、かつてのアッバース朝の都であったイラクのバグダードを包囲するが、西アジア特有の堅固な城壁に阻まれ苦戦した。そのときモンゴル帝国軍は、ある極めて強力な兵器を使うことで、この城壁を突破することに成功した。その兵器とは、いったいどんなものだったのか？

答え：

○マンジャニークー「回回砲」ー

- ・英国の中国科学史家ジョセフ・ニーダムによると、12世紀になって（おそらく北アフリカで）イスラーム教徒が改良を加え、大幅に威力を増大させ、100キログラム前後の石を274メートル飛ばすことができるようになった。
- ・1258年、第4代大ハンのモンケの命令により、フレグがアッバース朝の都バグダードを包囲した戦いにおいてマンジャニークが使用された。周辺の山々から採集した巨石を飛ばし城壁を貫通したことが決定打となった。
- ・1268年から73年にかけて、第5代大ハンのクビライの命令により、モンゴル（元）軍が南中国の南宋の要塞、襄陽（じょうよう）・樊城（はんじょう）を包囲した際、ビシュバリク出身のウイグル人武将アリクカヤの要請を受け、フレグ家当主アバカに依頼し、技術者のアラール・ウッディーンとイスマーイールを派遣させ、彼らが組み立てたマンジャニークで樊城の城壁を破壊し、そこから襄陽を砲撃し陥落させた。

Q7 モンゴル軍がバグダードや襄陽・樊城で用いたマンジャニークまたは「回回砲」とは、原始的な「戦争の機械」にいったいどのような技術改良を加えたものだったでしょう？（1分で絵を描いて答えよ）

答え：



OBTS

<後世への影響>

- ・ルネッサンス...マンジャニークは、回転運動を直線運動に変換する機関の発展の基礎に.
- ・「戦争の機械」は 15 世紀イタリアのルネサンス文人たちの想像力をかきたてる.

1432 頃, マリアーノ・タッコラ Mariano Taccola

1485 頃, レオナルド・ダ・ヴィンチ Leonardo da Vinci

1712 頃, トマス・ニューコメン Thomas Newcomen

○14 世紀の危機

- ・ウィリアム・H・マクニール 『疫病の世界史』

<ペストの伝播径路>

雲南—ビルマに古くから自然に存在

1331 年, 中国の河北に疫病が発生し人口の 9/10 が死んだ.

隊商都市アレppoをペストが襲った.

1338-39 年, 中央アジアのイシククル湖に近いキリスト教徒商人の共同体に, 悪疫が発生?

1347 年, クリミア (カフファ) に到達する.

1347 年から 50 年まで 4 年間でヨーロッパ全人口の約 3 分の 1 が死んだと推計.

<感染拡大の要因>

草原の齧歯類 (げっしるい) の穴で安定したすみかを見出した.

船舶の航路網.

北西ヨーロッパで, 14 世紀に人口の飽和状態.

14 世紀から気候が次第に悪化, 例年の局地的不作.

様々な状況が絡み合い, 破滅的な黒死病の到来に.

<ペストの社会的影響>

人びとの日常生活や未来の展望への衝撃.

ペストは, 最初の猛襲の後, 消え去ってしまうことがなく, 不規則な間隔で何度も襲来.

1347 年以前には, 生活資源に対し人口が過剰気味, 空席が出来ても補充がきいた. 高い技術を要する地位に不足をきたしただけ.

1360 年代, 70 年代とペストが再来するに及んで事情は一変. 農耕その他の単純労働における労働力の不足. 社会経済的秩序がヨーロッパの様々な場所で変化, 思想と感情の暗い空気が, 慢性的かつ不可避免的に広がった.

隔離検疫は早くも 1347 年に生まれ, 40 日間の隔離 (quarantine) が基準となった.

Q8 モンゴル帝国は疫病に対して何もしてこなかったわけではない。首都のような人口密集地帯で疫病と同時に起こる危機とは何があるか、それに対してどのように対処していたのか？

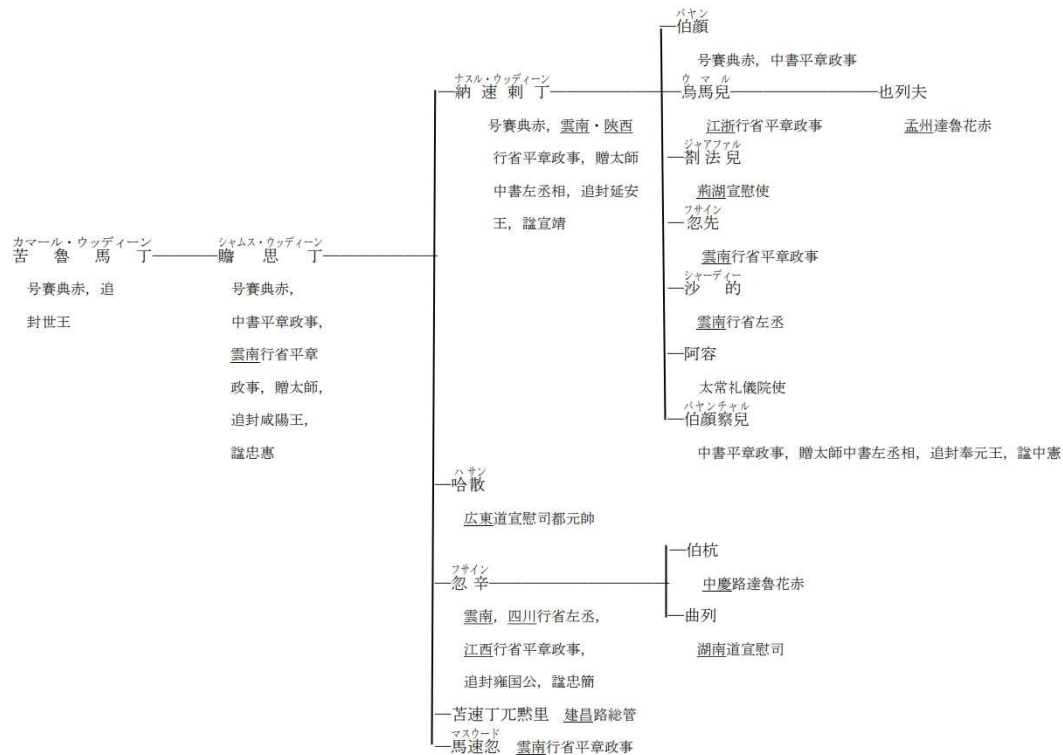
○アミール・ウマル、1308年の飢饉から大都（北京）を救う

- ・アミール・ウマルの活躍（『松郷集』『栄禄公世美碑』）。彼は中国東南部の福建行省の長官である平章政事から、より広域かつ重要な長江下流の江浙行省の平章政事になり、江浙等处財賦都総管府の仕事を兼任した。楊志玖の研究により、至大元年（1308）のことと判明。その少し前、江南（長江以南）で権勢を振るっていた朱清・張瑄が誅殺され、その田産はときの皇帝武宗カイシャンの母ダギの管轄下に、江浙財賦都総管府事はそれを管理する機構。ウマルが兼任しわずか半年の内に33万錠の収入を挙げた。
- ・その年、大都では6月の飢饉により疫病が蔓延、10月に大都の糧食不足が深刻。その年の正月から江南各地でも飢饉が起こり、江浙でも133万戸が流民となり、疫病が流行。朝廷は倉庫の穀物を放出して民に振舞い、高騰する米価を下げるなど努力を続け、さらに江浙行省に使者を走らせ、江浙行省より230万余石の糧食のうち58万石を前倒しして春に海上輸送するよう命じた。旧暦4月、無事に都に届けられ人々に振舞われた。海運は夏至（旧暦5月）東南風が吹き始めてから出航するのが通常。3月21日に劉家港から抜錨し、4月3日に無事に糧倉に運び込まれた。冒険的な任務だったのであり、到着した時、人々は目を見張った [楊 2003 : 356-362]。

○サイイド・アジャッル—真正なる聖裔

- ・中央アジア出身イスラーム教徒たちは、官僚としてモンゴル帝国に仕え、経済財政面で活躍、遠征軍の補給などを担当。モンゴルが江南の南宋を征服した後は、対外遠征や通商外交においてもイスラーム教徒たちの活躍が見られた。
- ・中国で最も有名なムスリム官僚、ブハラ出身のサイイド・アジャッル・シャムス・ウッディーン。サイイド・アジャッルとはペルシア語で「真正なる聖裔」、預言者ムハンマドの子孫を意味する。
- ・子のナスル・ウッディーンは雲南行省長官（平章政事）、孫のバヤン平章は成宗時代（1294—1307）にザイトウン（泉州）の知事から中央政府の宰相に。バヤン平章の弟アミール・ウマルも後に福建行省の首脳に。
- ・一族と故郷との繋がりが中国に来て以来どうなったのかは不明。ブハラはホラズム軍が立てこもりチングス・カンの遠征軍に抵抗したため、住民の全財産は没収され、大きなモスクやレンガで立てられた若干の宮殿を除いて、全市が焼き尽くされ、一時廃墟となった。しかしその後、ホラズム人官僚マフムード・ヤラワチの活躍により驚異的な復興を遂げ、10年後には繁栄を取り戻した [Boyle 1957 : 97-107]。

【系図 モンゴル時代のサイド・アジャッル家】



さいごに

- ・多くの場合、世界史は、世紀単位の時代のまとまりを時系列に従い配列する断代史のスタイルで書かれる
- ・実際には、さまざまな事物の連関や因果関係の連鎖は、ダイナミックに、時代や地域を越えて、縦横無尽につながっている
- ・未来が描きにくい「アジェンダの空白」にある今日、バウンドする創発的なネットワークについての知が求められているのではないか [向 2020]

解答篇

Q1 答え 3. 白地に青色の絵が描かれている

【解説】

元青花...モンゴル時代、濃い青色のもととなる中東産のコバルト原料が中国に伝わり、白地にくっきりとした青い模様（「青花」）を描いた磁器が景德鎮で生産された。粉末にしたコバルトガラス（酸化コバルト）をスマルト Smalt といい、中国の記録に「蘇麻利青」と記された。その洗練されたデザインが各地の人々を魅了し、牡丹紋、魚藻紋、花草紋、龍紋、鳳凰紋、蓮華紋といった中国風の紋様をあしらった巨大な瓶や中東地域の金銀器からの影響がみられる大皿、盆、水差しなどが世界各地に運ばれていった。

Q2 答え バター茶

Q3 答え 2

Q4 答え カテキン

Q5 答え 蒸すのではなく炒める

Q6 答え 投石機

【解説】

- ・ペルシア語文献に見えるマンジャニーク、漢語文献に見える回回砲（かいかいほう）は、いずれも投石機を指す。
- ・投石機は中国では「砲」と呼ばれ、紀元前 4 世紀から知られていた（『三国志』にも登場）。中央アジアでは、ソグディアナ（トランスオクシアナ）のペンジケント都市遺跡で見つかった 8 世紀初頭の宮殿の壁画に投石機が描かれている。
- ・それらの構造は、アームの先端に取りつけられたひもを多人数で一斉に引くことによって石を飛ばすというシンプルなものであった。

Q7 答え

縄を大勢で引く力によって石を飛ばす旧式から、端に取り付けた箱に重しを入れて、逆の端に石を吊るして、重しと石の重さの差によってアームを回転させて石を飛ばす仕組みに発達した。

【解説】

1. 投石機のアームの支点から遠い側の先端に石弾を吊るす袋を、支点に近い側の先端には重しを搭載する箱をしつらえる。
2. 重しがある先端が上方になるようアームの逆側を下げ袋に石弾を入れフックで固定する。
3. フックを外すとアームが弧を描いて素早く振れ、回転する袋から石弾が放出される。

Q8 答え

飢饉の直接の餓死者のほか、都市部では食料不足や穀物価格上昇により貧困層の死者が出る。遺体の放置、衛生状態の悪化、飢餓による抵抗力の低下などにより感染症が広がりやすくなる。またエッセンシャルワーカーの感染による衛生環境の悪化も起こりうる。対策として医師の派遣、医薬の提供のほか都市の備蓄食料の放出が行われ、穀物価格高騰防止に努めた。天候に関しては「祭祀祈祷」も行われ、民間の僧侶・道士への協力要請、高級官僚による現場視察、「帝王反省自己」（皇帝による反省）や「家庭自救」（自己責任）という例もみられた [和付強 2009 : 170-177]。

参考文献

〔日本語〕

- イブン・バットゥータ〔著〕、イブン・ジュザイイ〔編〕、家島彦一〔訳注〕1998、2002『大旅行記』3、7、平凡社。
- 榎本渉 2002「元末内乱期の日元交通」『東洋学報』84（1）：1-31。
- 尾崎貴久子 2006「元代の日用類書『居家必用事類』にみえる回回食品」『東洋学報』88（3）：27-55。
- 影山悦子 2011「ソグドの壁画の内容」曾布川寛、吉田豊編『ソグドの美術と言語』臨川書店。
- 川端道喜 1990『和菓子の京都』岩波書店。
- 忽思慧〔著〕、金世琳〔訳〕1993『薬膳の原典—飲膳正要—』八坂書房。
- 小葉田淳 1941「補論—陳外郎について—」同『中世日支通交貿易史』刀江書院、240-243。
- 坂井隆 2008「貿易陶磁」桃木至朗〔編〕『海域アジア史研究入門』岩波書店、pp. 180-190。
- 2009「インドネシア、トロウラン遺跡とベトナムタイル」『金沢大学考古学紀要』30：28-41。
- 佐藤次高 2008『砂糖のイスラーム生活史』岩波書店。
- 杉山茂 1999『薬の社会史—日本最古の売薬外郎・透頂香—』現代文芸社。
- 2000「中世日鮮交易における外郎（宋寿、常祐）の活躍」『薬史学雑誌』35（2）：195-201。
- 2002「陳外郎四世祖田について」『薬史学雑誌』37（2）：147-151。
- 杉山正明 1992『大モンゴルの世界—陸と海の巨大帝国—』角川書店。
- 谷口規矩雄 1980「陳友諒の『大漢』国について」『東洋史研究』39（1）：100-117。
- 趙汝适〔著〕、藤善真澄〔訳注〕1990『諸蕃志』関西大学出版部。
- テンブル、ロバート〔著〕、ニーダム、ジョセフ〔序文〕、牛山照代〔訳〕1992『図説 中国の科学と文明』河出書房新社（改訂版、2006）。
- 虎屋文庫 2017『和菓子を愛した人たち』山川出版社。
- 南方圏研究会 1934『阿仙薬と肉木荳蔻の研究』南方圏研究会。
- 長谷部楽爾 2005「モンゴルに見る中国陶磁」横浜ユーラシア文化館〔編〕『ユーラシアを駆ける—遊牧世界とオロンスム遺跡』pp. 133-161。
- 深野彰編著 2016『ういろうにみる小田原—早雲公とともに城下町をつくった老舗—』新評論。
- 福岡県〔編〕1962『福岡県史』第1巻下、442。
- マクニール、ウィリアム・H〔著〕、佐々木昭男〔訳〕2007『疫病の世界史』中央公論新社。
- マルコ・ポーロ〔著〕愛宕松男〔訳注〕1971『東方見聞録』2、平凡社。
- 向正樹 2013「モンゴルの海上進出を読み直す」『ふびと』64：21-44。
- 2019「モンゴル帝国とユーラシア広域ネットワーク」秋田茂〔編〕『グローバル化の世界史』ミネルヴァ書房、pp. 19-70。
- 2020「バウンドする伝播のネットワーク—ウマ、火薬兵器、蒙古襲来—」秋田茂・桃木至朗〔編〕『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育—』大阪大学出版会、pp. 186-213。
- 2021「元と南方世界」櫻井智美、飯山知保、森田憲司、渡辺健哉〔編〕『元朝の歴史—モンゴル帝国期の東ユーラシア—』（アジア遊学 256）勉誠出版、pp. 251-165。
- 和田博徳 1978「元末の群雄とベトナム—陳友諒・朱元璋に関する大越史記全書の記事—」『史学』49（1）：44、68-。

〔中国語〕

黄仲昭〔著〕, 福建省地方志編纂委員会〔主編〕1989『八閩通志』福建人民出版社（福建地方志叢刊）.

高偉 1994「元代太医院及医官制度」『蘭州大学学报』（社会科学版）22（1）：39-44.

和付強〔著〕, 袁祖亮〔主編〕2009『中国災害通史』元代卷, 鄭州大学出版社.

葉喆民〔著〕, 出川哲朗, 徳留大輔, 新井崇之〔翻訳〕2019『中国陶磁史』国書刊行会.

楊志玖 2003『元代回族史稿』天津：南開大学出版社.

朱裕平 2010『元代青花瓷』上海科学技術.

〔英語〕

Boyle, John Andrew. 1957. *The History of the World Conqueror*. 2 Vols, Manchester University Press.

Buell, Paul D. 1993. "SAIYID AJALL (1211-1279)." *In the Service of the Khan: Eminent Personalities of the Early Mongol-Yüan Period (1200-1300)*. Ed. by Igor de Rachewiltz, Otto Harrassowitz Verlag, pp.466-479.

Buell, Paul; Anderson, Eugene N. 2000. *A Soup for the Qan: Introduction, Translation, Commentary, and Chinese Text*. Routledge.

———2021. *Arabic Medicine in China: Tradition, Innovation, and Change*. Brill.

Carpini, Johannes. 2013. *The Voyages of Johannes de Plano Carpini* (English Edition). Ed. by Alex Struik. Trans. by Richard Hakluyt, Herne Ridge.

Hill, Donald R. 1973. "Trebuchets." *Viator, Medieval and Renaissance Studies* 4.

Needham, Joseph; Yates, Robin D. S. 1994. *Science & Civilization in China*, vol. 5, part 6, Cambridge University Press.